ap bank fes '05 environmental

report

CONTENTS

p2
はじめに

p3
開催地について

p4
絵でみる環境のこと

p5-6
オーガニックフードについて

p7-8
エコ雑貨について

p9
オフィシャルグッズについて

p10
オフィシャルパンフレットについて

p11-14
トークショー

p15-16
エネルギーについて

p17-20
ゴミ対策について

p21
ap bank partners （apbank融資先）

p22
ap bank fes'05収支報告

p23-24
最後に

はじめに

ap bank fes'05の環境プログラムをつくっていくにあたって、私たちが常に意識していたのは、「環境問題について考えないといけない」という押し付けにならないように、ということでした。「環境」と言ってしまうとシリアスで、何から手をつけていいのかわからないというイメージがあります。ですが、ポイと捨てたゴミや、毎日の食事や、部屋の灯りは、地球の資源の枯渇や自然環境の汚染などの様々な問題とつながっていて、それは、そのまま地球の環境や未来をどう左右していくのかの問題とつながっています。私たち一人が使っていない部屋の電気を消してもほとんど何も変わらないかもしれませんが、その意識が連鎖していくことで、新しい未来の扉を開くきっかけは作れるのかもしれません。今回のフェスではまず、「おいしい」や「楽しい」から、その先のつながりを意識できるような、そんなきっかけづくりを目標としました。

ap bank fes'05開催が決まってから開催までの数ヶ月間、そしてfesの3日間、私たちは理想と相反する、実にたくさんの問題と直面しました。例えば、合理性のことやコストのこと。環境にいい方が良いに決まっているのに、いろいろな問題無くならないことからもわかるように、現実には、多くの問題が複雑に絡み合っています。そこから何を選んでいくのか。新しい未来を自分で選んでいくことを提案していくからには、我々も自分たちの選択に責任を持たなくてはなりません。ゴミの分別やリサイクルの方法、オーガニックフードの出店者の構成、グリーンエネルギーを使うこと…。物販のTシャツの素素材から、会場で使う食器一つまで、現状はどんな問題があるのか調べ、どの選択をするのがベストかをスタッフで喧々諤々話し合いを重ねて検討しました。例えば食器に関しては使い捨てを使わざるを得ず、オーガニックで地球環境に負荷が少ないものを選ぶと、その分お金がかかってしまいます。そうすると、今回のイベントの主旨に共鳴して参加してくれた出店者の方や、来場者の方に負担がかかってしまうことになるのです。そういうことで悩みぬいたあげく、今回はあきらめたこともあります。

フェスを開催するということはたくさんのエネルギーを消費しますし、多くの人が各地から集まってくるということで多くのCO2を出してしまいます。結果、どうしても環境に負荷をかけることになってしまいますが、それならば少しでもその負荷を別の形でプラスにできるのかを考えるために、食や森林、エネルギーの問題と現状について知るための勉強会も4回に渡って開催しました。省庁の方や、環境についてずっと取り組んでいる方など総勢200名ほどの方が参加して意見の交換を行いました。
キレイ事のようですが、オーガニックフードエリアの風景が来場者に伝わっていくイメージだけを信じて、何度も何度も話し合いを続けました。この環境報告書は、ただの報告だけではなく、そういった試行錯誤のレポートでもあるのです。

Bank Bandの亀田さんは2日目に、実際にオーガニックフードエリアでトークショーを聞き、フードエリアの取り組みをいろいろ見てくださったそうで、その日の打ち上げの席で、「最初、自分が環境のイベントに関わるのはおこがましい感じがしたけど、参加するだけ、音楽を演奏するだけでいいんだってわかったし、それをすごく楽しめた」と実感のこもったスピーチをしてくださいました。同じくBank Bandの小倉さんも、「フードエリアも充分、音楽になってたよ」とおっしゃってくださいしたし、他にもオーガニックフードエリアを訪れてくれたアーティストはたくさんいらっしゃいました。アーティスト楽屋でみんながオーガニックフードを食べて、ゴミの分別をしてくれました。そうやって、アーティストも我々の環境への取り組みを肌で感じてくださって、そしてあの演奏が生まれ、その音楽を通じて来場者の方々もさまざまな何かを感じてくれたのと思います。

ゴミ分別やリサイクルなどの環境対策を手伝ってくれたA SEED JAPANの羽仁さんも、フードエリアのコーディネーションを手伝ってくださった南兵衛さんも、今までずっと環境のことに取り組んでいたけれど、自分で限界を決めてしまっていたところがあって、今回のフェスではその限界を超えられたと言ってくださいました。その限界を超えたのは、我々制作側だけではなくて、来場者の方々が、ap bank fes'05に流れる何かを感じて、楽しんでくれたことから始まったことなの思います。

ap bank fes'05のあの3日間、音楽と環境がつながって、本当に感動的ななにか新しいエネルギーが生まれ、みんなでそれを感じて家まで持って帰っていった現場を体感した私たちは、これからも、いろいろなつながりを幸せに感じることができるのだと思います。
この環境報告書は、2005年現在の私たちの試行錯誤の結果で、まだまだ甘いところも、これからもっと良く改善できるところもあると思いますが、あのつま恋の空気を共有した人にも、ライブに来れなかった人にも、身近な生活から地球や未来へとつながる何かを感じるきっかけになればと思っています。

ap bank運営事務局

開催地について

【静岡県掛川市について】

掛川市は「地球環境の保全」「自然環境の保護と復元」「生活環境の整備と保全」を基本方針とし、市民・事業者・行政が一体となって、環境保全に関する施策を総合的、積極的に推進しながら、持続的に発展可能なまちづくりに取り組むエコタウンです。
ゴミの分別・リサイクル、自然エネルギーの導入、温暖化防止対策、環境に配慮する事業システムの導入（環境マネジメントシステム＝EMS）で環境ISO14001を取得しています。

＊ISO14001とはISO(International Organization for Standardization)、すなわち国際標準化機構が定めた環境マネジメントシステムの国際規格で、企業などが事業活動を行う際に、環境への負荷を軽減する活動を継続して実施するための仕組みを定めた規格のことです。この規格では、継続的に環境に与える悪影響を減少させるための手順や手法を定めていて、組織の最高経営層が環境方針を立てることや環境方針を実現するために「目的・目標」を設定することなどが求められています。また、ISO14001は「環境ISO」ともいわれ、近年の地球温暖化など世界的規模の環境問題に対する手だてとしてつくられました。

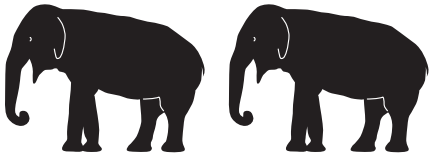
【つま恋について】

ヤマハのリゾート施設である「つま恋」は新たな経営方針として、2003年に「自然共生型」のリゾート施設をめざすことを打ち出しました。同年の環境報告調査の結果、施設の敷地内には植物536種（草木302種、木本234種）が自生し、鳥類14科47種（留鳥26種・夏鳥5種、冬鳥16種）と昆虫61種など、多くの野生動物が生息していることが確認されました。さらに、環境省レッドデータブック（2000）から絶滅危惧種に指定されているクロヤツシロランやエビネなどの植物が生育し、天然記念物にも指定されているオオタカが目撃されるなど、豊かな自然環境が保たれています。
「つま恋」では、自然環境の保全と動植物の保護を目指し、省エネルギーの推進、省資源、廃棄物の再資源化、削減を行っています。
今回ap bank fes'05でも、一部、「つま恋」のゴミの集積のシステムを利用させて頂きました。
「つま恋」は施設内に大きなゴミの集積場を設けており、数名のスタッフが回収された園内のゴミを手で分別しています。また、甲殻類の炭化装置を利用してゴミの再資源化を行っています。

絵でみる環境のこと

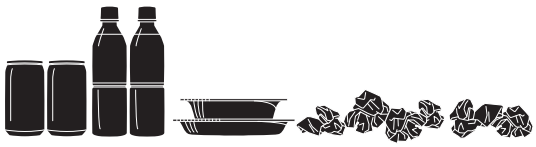
イベントによるゴミの発生量

3日間のゴミの量
9364.22kg



およそアジア象2頭分

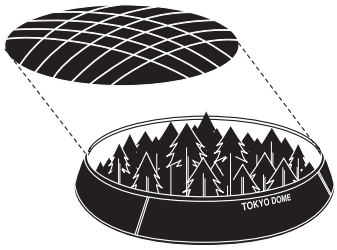
1人あたりのゴミの量
159g



およそ空き缶2缶、空きペットボトル2本、
紙皿2枚、A4コピー用紙6枚分

イベントによるCO2排出量

3日間のCO2排出量
60626kg



およそ、森林（スギ）4.7haの年間CO2吸収量
4.7ha=約東京ドーム1個分

1人あたりのCO2排出量
1.02kg

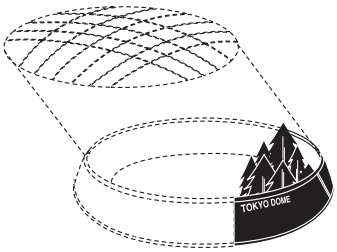
およそ森林（スギ）10㎡の年間CO2吸収量
10㎡＝約タタミ6畳分

グリーン電力の使用量とグリーン電力にしたことによるCO2抑制量

1日あたりのグリーン電力使用量
6000kwh

およそ一般家庭の2年分の電力

3日間の合計CO2排出抑制量
11088kg



およそ森林（スギ）0.9haの年間CO2吸収量
0.9ha=約東京ドーム　1／5個分

- CO2排出量は、シャトルバス、オフィシャルバスツアー、つま恋園内バスによるCO2の排出量を表しています。
- 発生したCO2には人間の呼吸によるCO2排出量は計上しておりません。
  これは、人間はどこに移動しても排出するCO2の量には変わりはなく、地球全体にあたえる環境負荷としては変わりはないという考え方からです。
  ちなみに人間ひとりが呼吸によって年間に排出するCO2はおよそ320kgで、森林（スギ）23本分の年間吸収量と同じです。
- 樹齢50年のスギ1本の年間CO2吸収量を14kgとして計算しました。
- 1人あたりの量は、イベント来場者58864人分の1人の計算です。

オーガニックフードについて

「ap bank fes'05」オーガニックフードエリアの「フードエリア」では、体にやさしく美味しい素材にこだわった食を提供する19店のお店にご参加頂きました。

【ap bankオフィシャルキッチン】

●KURKKU KITCHEN

有機野菜と放牧豚のキーマカレー、太陽チキンのつくね串、有機トマトと夏野菜のガスパチョを販売。

【ap bank融資先出店】

● えこふぁーむ：鹿児島県大隅半島で、放牧した黒豚のソーセージを販売。
● さんファーム：地元静岡産、無農薬の煎茶、紅茶、パンを販売。
● 野田塩べこの道：岩手県九戸郡野田村に伝わる「直煮製塩」の塩ラーメン、塩アイスクリームを販売。
● マーシャルズ・オーシャニック・インスティテュート

マーシャル諸島に未来型エコリゾートを建設。空輸したココナッツをそのままジュースで販売。

【日頃からオーガニックにこだわっている出店者】

● オーガニックカフェ　エクリュ：冷えうどん、ひじきマリネ丼を販売。
● カフェスロー：豆カレー、タコライスなどを販売。
● Zen-Zai：和風鶏モモ丼などを販売。
● ダージェンカ：手作り石窯で一つ一つ丁寧に作られたオーガニック素材のパンを販売。
● 大地を守る会：肉串、スイカなどを販売。
● つぶつぶカフェ：雑穀のつぶつぶ野菜いっぱいボウル、タルトやワッフルを販売。
● 麻こころ茶屋：「ヘンプ（麻の実）」を使ったヘンプバーガー、オーガニックベジ担々麺などを販売。
● 三帰天海さん：サワーシリアル、玄米精進カレーなどを販売。
● LOHAS E-LIFE：大豆ミンチのタコライス、オーガニックコーヒーなどを販売。
● WATAMI：産地直送のとうもろこし、有機飼料や牧草で育った牛の牛乳で作ったアイスクリームを販売。

【オーガニックに挑戦した出店者】

● 白猫堂：オーガニックのゴーヤチャンプル丼、豚肉甘酢あんかけ丼などを販売。
● NAP JAPAN：北アフリカ料理を提供。オーガニックでチキンケバブサンドイッチを販売。
● バミューダ：ロシア料理、ビーフストロガノフ、シャシリク（鶏肉の串焼き）などを販売。
● Bobby's Bar：粉からこだわったうどんを冷・温で販売。

フードエリアのとりくみ：容器について

1日2万人の来場者にテイクアウトフードを提供するためには、容器が必要不可欠。容器の種類は様々で、何を選ぶかがゴミの排出量にも大きく影響します。ap bank fes'05運営事務局では、使い心地、コストなどを考えて、様々な容器を検討しました。生分解性容器、リユースカップ、非木材紙製容器などです。生分解性の容器は、月日が経つと土に還るという素材なだけに、温かい汁物をいれると少し弱いなどという問題があります。そこで決めたのが非木材素材のバガスやケナフなどの一年草をブレンドしてつくられたパルプモールド（大黒工業株式会社）。熱に強く、土に還る素材なので焼却、廃棄も安心というものです。また今回、一部で洗って使えるリユースカップでのドリンク提供・販売も行いました。

■諸橋新之助さん（KURKKU KITCHENシェフ）
オーガニックフード出店

ap bank fes'05にKURKKU KITCHENを出店するにあたって、私は以下のようなことを念頭に置いて食材探しをしました。
1）普段食べている物であること　2）安全で健康的であること　3）何かに還元しているもの
4）今後に期待できるもの　　5）美味しいもの
ap bank fes'05は私にとっても初めてこういった形で参加するイベントであり、今までは有機野菜も「安全だから」というより、「美味しいから」店で使う程度だった自分をのめり込ませる絶好の機会になりました。主にインターネットや人からアドバイスを戴いて食材を探しました。話が進むうちに、現場の方々に直接会ってお話を聞きたくなり、押しかけたり来て戴いたりしました。今現在の為だけに安全で健康的な食材を作っている訳ではなく、土地、自然、地域、人の100年後200年後が楽しみで、今この仕事が続けられると語って下さった方もいらっしゃいました。これからはやはり、100年後200年後を見据えて生活して行かなければならないと感じます。フェスの際はゴミも分別し、何万人もの人が訪れたにもかかわらずほぼ完璧に達成でき、そしてその意識も持ち帰って戴けたはず。しかし、生活においてそれだけの分別をしても、次に引き渡す所が無かったり、分かりづらかったりして、せっかくの事が無駄に終わってしまう事が多い様な気がします。これからは、飲食の現場としてやれることは小さいかもしれないけれど、コツコツとやって行きたいと思ったフェスでした。

■南兵衛@鈴木幸一さん（アースガーデン）
オーガニックフードエリアコーディネート

「オーガニックで一日1万食を3日間、ホントにできるのか!?」これが最初に相談を受けた時の率直な感想。これまでの最大の実績でも6軒で2日間5000食程度。今回のような質量を求められた事自体、前代未聞です。可能性のある限りのお店に相談し過去の実績を50％増しで計算しても、1日5000食程度が当初の限界。これを、元々オーガニックでなくとも柔軟性のある出店者に相談し、仕入れを流通とコストで確認し、と進んでいくウチに思いもしないメニューが現れたりして辿り着いた本番でした。それでも、おそらくオーガニックに触れるのは大部分が初めてだろう参加者が、どういう反応をしてくれるのかは未知数で、アーティストである小林さん櫻井さん自身の言葉、webでの丁寧な紹介もあったとは言え、心配は小さくありませんでした。まして多くの出店者の前例のない協力があっての場づくりでしたから。そうして1日目の昼過ぎに長い長い行列が各出店の前にできて、さらに芝生の上で多くの若者が楽しそうに食事をする姿を見れた時にはホッとしました。最終的に今回のフェスでの提供食数は3日間で5万食に迫り、まさに桁違いの実績となりました。今回のようなチャレンジが他でもできるわけではありませんが、オーガニックでもここまでできると言う前例、大きなステップとなり関係者には忘れられない場になったのです。

エコ雑貨について

「ap bank fes '05」オーガニックフードエリアの「エコ雑貨エリア」では、環境に配慮した雑貨を取り揃えたお店やフェアトレードの商品を取り扱うお店など、8つのお店にご参加いただきました。

■オフィスオクト
サスティナブルで環境にやさしい製品を北欧から輸入・販売。環境調和性が高い素材、環境負荷が少なく、長寿命化、資源・省エネルギー、クリーンエネルギー、リデザインなど様々な基準を定めた商品選択を行っている。ドイツ生まれの食器洗剤「フロッシュキッチンウォッシュ」、携帯チェア「エルゴライフチェア」などを販売。

■スローウォーターカフェ
南米エクアドルの森で無農薬コーヒーを育てたり、フェアトレード商品などを扱う。環境を考えるイベントを開催するなど、多方面で活動している。サイザル麻の一種カブヤを手編みしたフェアトレード商品の水筒ホルダーや、携帯のお箸などを販売。

■ナファ生活研究所
黄色ブドウ球菌の繁殖を抑えるということで注目の素材「竹繊維」の研究・開発・販売を行っている。「竹布のウォッシュタオル」「竹ガーゼのキッチンクロス」などを販売。

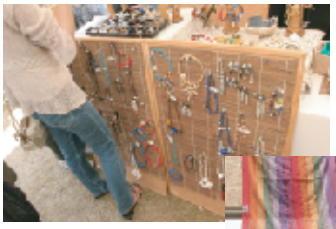
■ネパリ・バザーロ
ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画・開発を行い、継続的に輸入を行うことで就業の場の拡大を目指すフェアトレード団体。ネパールの女性たちによる手作りアイピロー、ネパールの新鮮なスパイスがセットになったネパールカレーなどを販売。

■ピープル・ツリー
自然素材の衣料品から雑貨、食品などの商品を紹介する通販マガログ（magazine-catalogue）を発行。アジア、アフリカ、南米20ヶ国からのフェアトレード商品、エコロジー製品など約1000点を扱う。草木染め手ぬぐい、収益の一部が途上国の労働者の支援活動に寄付される「フェアトレード・ホワイトバンド」などを販売。

■ボディクレイ
人間にも地球にも優しい素材である「粘土」を商品の製造・販売を行う。粘土のせっけん、クリーム、クレイパック、歯みがき粉などを販売。

■メイド・イン・アース
製造過程からこだわったオーガニックコットンの商品の製造・販売を行う。オーガニックコットンのタオル、Tシャツ、折りたたみ日傘などを販売。

■わんのはな＆エコ雑貨コム
「地球と人と動物に優しい商品」をテーマに、人と愛犬のナチュラルエコロジーを考えるオンラインショップ。ハーブからつくられた虫除けスプレー、蚊除け線香、介助犬チャリティーTシャツなどを販売。



■藤岡亜美さん（スローウォーターカフェ）
エコ雑貨出店

フェスの自然エネルギーへのチャレンジに共感し、どうせ借りるならと、ハイブリッド・エコカーのプリウスをレンタル。
なんとか積み込んだ商品を前日に搬入し、以後3日間、エクアドルの自然素材のフェアトレード雑貨を中心に商品の販売をした。会場がオープンする11時から、ライブが始まる4時まではほとんど人が絶えず、ごはんを食べる間もなかったくらい。耳に素敵な音楽、お腹にオーガニックごはんで、ごきげんな参加者のみなさんは、自然素材や自然染色のこと、作り方や生産地の森の話、例えば水筒で自販機がボイコットできるというような暮らしの中のエコ話にも興味津々で、楽しそうに質問をしていた。
フェス自体が、帰って誰かに伝えたくなるような時間、場所だったので、商品説明の話の質も求められている気がして、丁寧に答えた。
また、今回来ることのできなかった友人や家族にと購入していく方も多く、お土産からもエコやフェアトレードが広がっていくと思うとワクワクした。ゴミはほとんど出なかったが、会場と同じように9つに分別。
後日、会社の夏休みを利用してap bankの融資先の一つである、野田村に遊びにいくと、村の祭りでゴミが9分別になっていた。これって「エコレゾ」ですよね。

オフィシャルグッズについて

ap bank fes'05ではオフィシャルグッズの素材にこだわりました。

デザイン豊かなオフィシャルTシャツのサラサラとした肌触り。あの気持ちいいTシャツの素材は「ケミカルリサイクル」という新技術で作られたポリエステルです。
私たちが使ったペットボトルが回収され→工場で分別→破砕機でペットボトルをフレーク状に→加熱沸騰させて蒸留・精製→精製した粉をまたポリエステルチップに重合→チップを糸に加工して→それがTシャツになるという仕組み。
劣化が少なく何回でも再生が可能なエコ素材です。

タオルには「ベンベルグ」という、綿花の花でなく通常は使用しない種の部分で出来るコットンリンター（綿毛）を使用し、資源を有効活用しています。この素材は有機物なので土に還ります。
買い物にいったらビニール袋をもらう代わりに使いたいエコバック。ゴミの削減にも一役かってくれます。

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

田中退三さん（ぴあ株式会社）
オフィシャルグッズ制作・販売協力

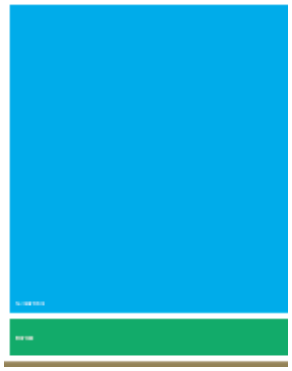
グッズ制作では「エコを伝える」ことを心掛けました。
皆さんに「エコ」を分かり易く感じてもらう為に、全てのオフィシャルTシャツをコンビニエンスストアのゴミだったペットボトルからリサイクルしました。その工程も会場やホームページでなるべく詳しくお伝えしたツモリです。会場でのグッズ販売では月並みですが、ゴミ分別やゴミをなるべく少なくするように工夫しました。ゴミ袋を色分けしたり、カップを使い捨てないようにしたり・・・。今までずっと分別しないでゴミを捨てることや使い捨てることにすごく後ろめたさを感じていたので、何だかいい気分でした。エコじゃない行動をしてしまった後ろめたさは誰でもちょっとは持っていると思います。「ap bank fes'05」はみんなで「これでもか！」というくらいエコなことをすることで、そんな後ろめたさを払拭できる、奇跡のようなイベントだと実感しました。もちろん、音楽が何よりスバラシイし、今回のイベントに携わったことで「本当に良いことって気持ちがしっかり伝われば規制とか促進なんてなくても実現できるんじゃないか」と青臭い想いが今もいっぱいです。ありがとうございました！

(1) eco-reso Tシャツ　佐藤可士和さんデザイン
(2) ECOSTASY Tシャツ　河原光さんデザイン
(3) ニコチャンズ シャツ　信藤三雄さんデザイン
(4) ap bank fes Tシャツ　豊嶋秀樹さんデザイン
(5)「to U」Tシャツ　森本千絵さんデザイン
(6)「to U」バック、タオル　森本千絵さんデザイン

オフィシャルパンフについて

内容はもちろんのこと、本そのものも環境を考えてつくりました。

まず、紙は再生紙、間伐材紙、非木材紙など9種類の紙を一折（16ページ）ごとに使用。環境に配慮した紙の現状をみつめました。インクは、「再生植物油インク」を使用。このインクは大豆油の廃油を再利用したもの。シックスクール症候群の原因となるアロマチック成分が含まれる石油系溶剤を使用しない、体にやさしいインクを使用しています。印刷方法は「なしオフセット印刷」。通常、印刷方法には2種類あって、石油系溶剤グラビアインクを使う「グラビア印刷」と植物油を使える「オフセット印刷」の2種類。「オフセット印刷」にも水を使用するものと、水の代わりにシリコンを使用する「水なしオフセット印刷」があります。植物油使用で、出来れば水も使用しない、という思いから「水なしオフセット印刷」選びました。
製本方法は、「難細裂化ホットメルトを使用した無線綴じ」。大きく分けて、背にホッチキスがある「中綴じ」と、糊で綴じる背表紙のある「無線綴じ」の2種類がありますが、実はリサイクルしやすいのは「中綴じ」の方。「中綴じ」は水に溶かしたときホッチキスと紙がきれいにわかれるから。一方「無線綴じ」の糊は水に溶け出してしまいリサイクルに最適とは言えないのです。そこで水に強い糊の「難細裂化ホットメルト」を使用。これによって糊と紙がきれいに分離しリサイクルしやすくなります。
この方法を使っているのは、日本ではこのパンフレットと、「ナショナルジオグラフィック」のみ！



川口美保さん（SWITCH）
オフィシャルパンフレット編集

雑誌の編集者として「言葉、写真、デザイン」で何を伝えられるのかということはもちろん、そのパッケージとして、「紙」のことや、「印刷、製本」についても、現在の状況を把握した上で、もっとも現実的に環境に配慮したパンフレットを提案できればと考えました。
それは、小林、櫻井両氏が、自らの責任で、「音楽」という彼らのやってきたことを通して私たちに伝えてくれたことだったと思います。それぞれがそれぞれの立場、得意分野で、今の自分の仕事を通してどういうふうに環境に関われるのかを見つめ直していけば、自ずとやるべきことは見えてくる。それをひとつひとつ形にすることが、私たちのパンフレット作りの基本でした。
だから内容も、有機野菜やオーガニックコットンに取り組んでいる方の話を入れたり、融資先を取材したり、その人たちがその人たちの立場でどのように環境のことを考え取り組んでいるのかを具体的に見てもらおうと考えました。そしてそれらを取材した作家やライター、写真家もまた、自らの仕事を通して、「伝える」ことの大切さや意義を感じながら、関わってくれたと思っています。
そしてそれが、パンフレットを手にとり、めくっていくときに感じる再生紙の肌触りの違いや、写真やイラスト、様々な取材を通して書かれた原稿を読むことで、読者がまた自らの中でできることを改めて考えるきっかけになれば、と願ってやみません。

トークショー

「ap bank fes'05」オーガニックフードエリアでは、「ap bank dialogue」と題し、トークショーを行いました。司会進行役は"ap bank　MC" としてGAKU-MCさんにお願いし、小林武史によるイントロダクションに続いて連日ゲストを招いてのトークとなりました。

小林武史（ap bank代表）

坂本龍一さんたちが作ったArtists' Powerというプロジェクトがあって、そこでアーティストが環境や自然エネルギーの促進のことで何かできないだろうかという呼び掛けがあったんです。メーリングリスト上で環境のことをいろいろ勉強してきて思ったのは、環境ってこれを一つやっていればいいという明確な答えがあるわけじゃないんですね。それで、学識者の方や環境について長く取り組んでいらっしゃる人たちを呼んで、現状がどうなっているのかを教えてもらう勉強会をやったんです。そのときに、未来バンクの田中優さんと出会って、僕らが発想を得たのは、お金ってすごく大事なんだということ。税金にせよ、銀行に預金しているお金にせよ、それが巡り巡って戦争や経済のために使われたりする。そういうことが全部繋がってるんだということがわかって、その辺のことを僕らが考えていくことが大事だなと思ったんです。そのときに、僕らが今まで音楽をやってきて稼がせてもらったお金をそういう部分に使うことがいいのではないかと考えて、僕らも市民のためのbankを立ち上げた、これがap bankのそもそもの始まりです。名前のapは、坂本さんからもらったアーティストパワーという流れと、オルタナティブパワーというもう一つの流れの意味も込めています。

最初、僕らとしては、地味にやっていこうということだったんですが、実際に融資を始めてみたら、やっぱりお金もかかる。最初に出し合ったお金もどんどん減ってきて、しかも1%という低金利で始めたので、やっぱり自分たちで活動資金をなんとか考えなきゃいけないねということになったんです。それだったら、得意な音楽がいよいよ出番かもねという感じで、Bank Bandが始まるひとつのきっかけになりました。それでBGMというライブをやってみたら、本当に自分たちに返って来るわけです。音楽って楽しいし、それを聴いてもらったお客さんも本当に楽しいと思ってくれて、そうやって繋がっていけるんだっていう実感みたいなものがまた僕らをやる気にさせてくれる。そうやって循環していくんです。

去年の段階ではまだ、僕と櫻井のクローズした世界だったものが、僕らの方としても、少しずつ ap bankの意志が伝わってきているんだという実感があって、それならば、いろいろなアーティストたちや環境に取り組んでい人たちと一緒にやれたり分かち合えたりする方が自然だなということで、それがこのフェスへと繋がっていったんです。

そういったap bankの活動の流れや、Bank Bandの初のオリジナル曲「to U」に込めた思い、このap bank fes'05をやることとか、そういう繋がりを一言で言うと、どういう言葉が一番ふさわしいんだろうと探してたんですよ。コピーライターの人といろいろ会話していたら「それはきっと意識を伝えていくことなんじゃないかな」ということでできた言葉が「eco-reso（エコ・レゾナンス）」なんです。レゾナンスとは共振・共鳴するという意味。エコは生態系とか生態学みたいな意味だから、つまり僕ら生きてる全てのこと。心のこととか、そういうことも全部含むと思ってもらった方がいいかもしれないけれど、そういうことが僕らをもっと楽しく、せっかく命を授かって生きてる中で、みんなそれぞれ自由に楽しんでいくための言葉なのかなと思っています。

そういう僕らの意識を、みんなに「これいいことだから参加しようよ」っていうんじゃなくて、僕らは実感してやっていることだから、みんなにも実感として伝わっていけばと思うんです。例えばオーガニックのカレーを食べて、「あっ美味しい」って思う。良い音楽を聴いて、「あっこれすごく好きだ」って実感する。その実感した奥に、何がいいんだろうっていう、そこに込められているものをみんなが知っていくことによって、いい方向に変わっていく。それが未来が変わっていくということなんだと思うんです。

20世紀、地球上では、この100年でものすごい勢いでエネルギーの使用量が上がっている。だけど今まで僕たちはその未来に対して無意識にいろんなことをやってきていたんです。もちろん便利になって良くなったこともあると思うけど、良い部分は残して、もっと良くなる部分は追求して、もっと人間らしさとか、他者との関わりとかそういう意識を共振・共鳴させていけるようなことを、ap bankはやりたいんだなと思うんです。

人と人が助け合ったり、誰かを活かすことが出来たらそれは自分自身にとってもすごく幸せなことなんだと思うんです。それは、また自分に返ってきたりするわけですからね。

この会場でブースを出店してくれている人たちも、みんな明確なこだわりを持って、何かを発見して何かを始めている人たちだろうなと思うんです。だからみんなも何か、今日このap bank fes '05で、フードエリアでの間や音楽を楽しんでもらって、実感から何かを持ち帰ってもらって、何か始められたり、気づけたりしてくれれば、それが僕は一番嬉しいですね。

7月16日
ハセベケンさん（green bird代表）
羽仁カンタさん
（A SEED JAPAN理事・ごみゼロナビゲーション統括責任者）

ハセベ　僕はgreen birdというNPOで、表参道を中心心に下北沢、駒沢公園、そして福岡でも活動しています。どういう活動をしているかというと、簡単に言うとゴミ拾なんです。ただ、単にゴミ拾いをしても、ごみはなかなか減らない。それで僕らは、ポイ捨てしない人をどうやって増やしていこうかということを考えて活動しています。green birdマークのカンバッチを持っている人はポイ捨てをしない人、そうやって捨てない仲間を増やす。僕は元々、広告代理店にいたので、面白いグラフィックを作って、街でポストカードにして配ったりとか、そういうことをやっています。

羽仁　僕らは12年間ずっと音楽のある場所で、来場者参加型のごみの削減活動をしています。音楽のある場所には希望があるし、変えていける可能性があるかなとって、野外音楽フェスティバルを中心にごみをゼロにしたいなと。僕らは実際にはごみ拾いをやっているのではなくて、お客さんがごみを分別しやすくするとか、ごみを捨てないようにする仕掛けを作る活動をしています。

――今日持ってきていただいたものをちょっと紹介してください。

羽仁　これはキャンペーンバッグと呼んでいる、ごみ袋なんです。2種類あって、入場ゲートで配ってます。この袋に書く言葉も、（小林）武史さんに見せてみんなで話しながら、メッセージを考えて作りました。この袋は去年のいろんなイベントで集めたペットボトルをリサイクルして作りました。フェスティバルの中での資源循環ということでフェスティバルでみなさんが分別して回収した資源が、またフェスティバルの中で使う何かになるっていう方が分かりやすいし、僕らもやりがいがあるかなと思っています。あとは、今回みなさんに分けてもらった紙コップをトレットペーパーにして、来年みなさんとトイレで再会してもらえたらと思っています。それと今回のためにタワーレコードさんにご協力いただいて作ったリユースカップというプラスティックのコップがあります。みなさんに借りてもらって、このコップでビールやジュース飲んでもらうことで、ごみを減らす。借りてくれた方全員に「ap bank fes'05特製カンバッチ」を差し上げています。

――今日の議題は「ごみ」という話です。僕はごみの分が9つに分かれていることに気づきました。

ハセベ　分別は楽しいんですよ、覚えると。せっかくだから今日は9種類の分別をみなさんに覚えて帰ってもらったらいいかなと思います。

――なぜ「9」なんですか？

羽仁　いろいろ考えていくと、これもあれもリサイクルできると、どんどん増えていったんです。一回、10を越えたんですけど、あまり多いとお客さんも大変だろうし、初めてやることで分からないだろうということもあって、9分別に落ち着きました。今回ap bank fes'05のすごいとこは、その分別したごみをどこに持っていって、どうやってリサイクルするかまで考えて、ちゃんと段取りをしてあるんですね。みなさんに分別する行為だけではなく、分けないとごみだけど、分ければ資源になるということを知ってほしい。その意義を理解した上で分別してもらったら、限りある資源もなくならないかなと思います。

――ハセベさんの地元は渋谷区ですけれど、その地域をクリーンアップしていこうという動機は何かあったのですか。

ハセベ　僕は表参道で生まれ育って、自分の街でいいことしたいって言ったらちょっとかっこつけすぎかもしれないけど、そこで少しは役に立つことをしたかったんです。結構やんちゃしてた方なので、迷惑をかけた分を償おうかなというぐらいの気分で始めたんですね。

――実感として自分が携わってきた街がきれいになっていくのはどうですか。

ハセベ　基本的には表参道ってきれいになってきているると思います。地域の人が参加してくれるんです。そういう人がすごく増えてきているから、ちょっといい感じになってきたなという実感はあります。何でもいいと思うんですよ、できることをちょっとでいいからやるとずいぶん変わると思うんです。僕が今、街で掃除という活動をボランティアでやっているのはいろんな流れがあって始めてるんですが、やってみて気づいたことは、掃除ってめちゃめちゃ簡単なことなんですよ。だけど掃除すると、そこから色んなことに気づき出す。だからきっかけというのが大切だと思います。無理せずにできることからやるっていうのが大切なんだと思いますね。

7月17日
大橋マキさん（アロマセラピスト、ライター）
藤岡亜美さん（スローウォーターカフェ代表）
一青窈さん（アーティスト）

大橋　今は病院でアロマセラピストとして働いたり、雑誌のライターだとかをしています。それまでエコっていうものをそんなに身近に思っていなかったんです。だけど、みなさんもご存知かもしれないですが、そもそもアロマセラピーというのは植物なんですね。匂いのする植物からエッセンシャルオイルという香りのする成分をとりだして、それをマッサージだったり匂いを嗅いだりして使うもの。例えば北アフリカの方で干ばつが起こるとするとゼラニウムというお花が急にとれなくなっちゃったりというように、ダイレクトに天気の影響も受けるし、その土地の土だったり、太陽の光の具合だったり、水だったりの影響を受けるんです。そういうものだから自然とは繋がってくるものなんですね。

一青　大橋マキちゃんとは同じ学校で同級生なんですが、エコのことをちゃんと考えていたり、ごみ拾いをしている友達が周りにいたりして、感化されることがたくさんありました。例えば、みなさんに「ごみ拾って」と言ってももその時は「一青窈が言ったから拾ってみようかな。」と思ってくれるかもしれないけど、それを持続していくのは難しい。だから、続けて行けることをして欲しいと思うんです。

藤岡　私はスローウォーターカフェという、南米のエクドルとフェアトレードの食品や雑貨を販売している企業を仲間たちと一緒に運営しています。もともと旅行に行くのがすごく好きで、ある時バックパックを背負ってエクアドルという国に行ったんです。そこで日本の企業の鉱山開発、つまり、日本人がエネルギーをたくさん使うための開発で村や町を失いそうになった人達に会いました。でも彼らはその開発にはっきりノーと言い、村から開発者たちを追い出し、森の中でコーヒーを作ったり、麻のグッズを作ったりすることで、森や川にもっと深く寄り添って生きていこうということを始めていたんです。それがすごく楽しそうで、コーヒーもおいしいし、かわいい商品も一緒に作れるんじゃないかと思って。森林栽培コーヒーや水筒ホルダーなど、暮らしをスローダウンするものを作って販売しています。

── 一青さんはなんかかっこいい鞄を持っていますね。

一青　これは「フライターグ」というバッグです。スイス会社のもので、トラックの幌や自転車のチューブ、シートベルトなどの廃材でできています。みんなお洋服も欲しいし、買い物もしたい。そんな中で、このバックは新品だけれども、素材は使われたトラックの幌。こういうものを買って、リユースというか、その感覚で消費をしていくのはいいんじゃないかと思っています。

── その消費の方向を考えようっていうキーワードがありましたよね。

一青　サステナブル・コンサンプションです。「サステナブル」が「持続可能」という意味で「コンサンプション」が「消費」。これは国連のプログラムなんですけど、要するにみんなお金を使うなら、持続可能なものにしていこうよということ。私たちにできることはそれじゃないかなって言っているんです。

大橋　こういうライブ会場に足を運ばれる方って、エコへの意識も高いと思うんですが、それを楽しみたいという気持ちが自然にある人たちなのかなって思うので、こういうバックとかで、おしゃれもちゃんとするんだけど、それがあんまり地球に負荷がかからないみたいなことが自然にできるのがいいですよね。

── 藤岡さんが始めたという電気を消す活動の話をちょっと聞きたいなと思うんですが。

藤岡　「100万人のキャンドルナイト」って、聞いたことある方も多いと思うんですが、夏至の日と冬至の日の8時から10時までの2時間電気を消して、ロウソクの明かりでその2時間を過ごしてみようという提案なんです。発端は3年前、ブッシュ政権の原子力政策、原発をたくさん作ろうという政策に反対するアメリカとオーストラリアの人たちが世界にEメールを流したんですね。「みんな8時から10時まで電気を一斉に消そう」って。その時間をどう過ごすかは自由なんですが、地球の自転にあわせて、それぞれの暗闇の時間、自主停電のウェーブは経度から経度と世界中をリレーしていく。暗闇の帯が地球上をぐるぐると回っていくということだったんです。私はその時学生だったんですが、「カフェスロー」という、オーガニックのコーヒーやスローフードを出すカフェを仲間たちと立ち上げたばかりだったので、そこで電気を消してロウソクの光、音楽は生演奏だけで営業する「暗闇カフェ」を企画しました。いつも「あるもの」がないって、結構びっくりするじゃないですか。ちょっとなくなっても対応できる身体や、暮らし方に気づいてみるとか、同じようにロウソクを囲む家族が世界中にあることを思うとか、いろんなきっかけになっています。こんなに夜って暗かったんだと思いだすことができたり、それだけでも一つの自然との繋がりだと思うんですよ。

7月18日
田中優さん（未来バンク理事）
平野義孝さん（トヨタ自動車株式会社宣伝部企画室）

田中　私は、お金の問題や、環境問題、戦争の問題をずっと調べ続けてきました。その中で、何が本当の原因だったのか考えてみたら、貯金というものに辿りついた。みなさんが銀行などに貯金しているお金は、何に使われているか考えたことはありますか？

── あまり考えたことはないですね。

田中　普通はそうだと思いますよ。実はそのお金、戦争の費用や、環境を壊す費用になっていたりするんです。森林を壊したり、ダム建設に使われたりしている。どうしたらそれを自分たちの作りたい社会のために使えるか、そっちにお金を回したらどんな風に社会が変わるだろうか、と考えたんです。それで、このままの貯金ではなく、お金の流れ方を変えることを考えました。それなら自分たちの貯金が環境を悪くすることに使われなくなる。それどころか環境に良いことが現実に出来るかもしれない。そう思って11年前にたった7人、400万円の資金で始めたのが未来バンクです。今では1億6千万円の出資が集まっています。得はないが、損することはある出資なのにそれでも出資者は増え続けているんです。そんな試みが共鳴し合って、非営利バンクも日本中にどんどん増えてきて、自分たちの必要なところに自分のお金を流していこうって動きが始まっている。私は、そういう可能性の中から、次の未来を見たいと思っています。

── もう一人のゲストはトヨタの平野さんです。トヨタと言えば、やっぱりプリウスでしょう！　あの車はどういうことになっているのでしょうか。

平野　ほとんどの方が乗っている車はガソリンエンジンで動いてます。でも、プリウスはボンネットを開けるとエンジンがあって、横には大きなモーターが入っているんです。自転車を漕ぐところを想像してもらえると分かりやすいんですが、停まったところから走り始める時、すごい力を必要としますよね。走り出してしまえばスイスイ走ってくれるエンジンも、最初の走り始めが苦手なんです。その点モーターは発生した力を直接タイヤに伝えるため、エンジンが苦手としている走り始めでも問題ない。一方でエンジンは、スピードが上がった状態では、非常にパワフルかつ効率的に走れる。プリウスは、始めの20〜30キロはモーターで走り、速度が上がっていくとガソリンエンジンで走るという効率を考えた仕組みになっています。その上エンジンで走っている時でも、スピードがいらなくなるとタイヤを回していたモーターが発電機になって、余った力を電力に変える。そうした構造が、プリウスがいま注目されているポイントなんです。

── 僕今日は、ちょっとかっこいいサンダルを履いてきたんですよ。タイヤとチューブで出来てる、おしゃれなサンダルなんですけど。なんか、これだけで前向きになれた気がします。楽しみながら出来たなって感じで。

田中　環境問題というと、我慢とか忍耐とかって思われがちですが、人が生まれてから死ぬまでの間に出来ることって限られてるわけだから、楽しまなきゃ嘘ですよ。楽しくやれないんだったら、やらない方がいい。その楽しいものって何かと考えてみると、やっぱり人と共有した体験なんです。こういう場所に来て、同じ時間と空間を共有する。そうやって共鳴していくんだなって思うんです。

平野　まさにそう思いますね。例えばプリウスは環境にやさしいというだけじゃなく、環境と「感動」を両立した車なんです。感動とは、まさに「走り」。車って走らないと意味がないですよね。環境のことを考えたら車なんて無い方がいいかもしれないけれど、最適な移動手段として車はどうしても外せない。となると、みんなが気持ちいいと思うものが一番だと思うんです。環境のために「走り」を我慢しても、結局は続かない。人のためにとか何かのためにじゃなくて、選んだものに対して自分が気持ちいいと思う。そういうことが大事なような気がします。

── 田中さん、エコ1年生の僕やお客さんに、一体どんなところから始めたらいいのか教えていただけますか。

田中　家の中の待機電力ってありますよね。リモコンでパッと付けるためだけに流れている電気。あれは、AV機器やIT機器で約7割を占めているんですよ。

── そのコンセントを抜くってことですか。

田中　スイッチ付きのコンセントを付ければいいんです。その電気代を計算してみると、2、3ヶ月くらいでスイッチ付きコンセントの元が取れてしまう。これまで私たちは社会の中で、「お客さん」という状態がいけなかったと思うんです。

── いつも受け身だった、ということですね？

田中　そう。電気もごみも、誰かが何かをやってくれて、それを見ているだけだった。でもそうじゃなくて、我々自身がそれをやる側になったっていいと思う。そう思うことで、これまでお客さん的な発想でしか見てなかった社会が、実は我々が参加することで変えることが出来るとわかってくる。僕自身、今回のフェスにすごく感動しているんです。単なる一過性のイベントではなく、リサイクルや金融という形で未来にも繋がっている。このフェスは社会を変えていけるイベントなんです。今日このフェスをみんなで共有できたわけだし、だから今度は自分たちから何かを作っていく番です。やれるチャンスはいっぱい転がっていて、そこから社会が変わっていったら、こんなに嬉しいことはないですよね。

エネルギーについて

1日あたり6000kwh。持続可能なエネルギーを購入。

自然エネルギーには風力、太陽光、バイオマス、小水力、波力、湖力などがあります。今回、ap bank fes'05で使用したのは、太陽光発電とバイオマス発電。実際には、「使用した」のではなく、「購入」しました。これは自然エネルギーの持つCO2削減などの環境負荷価値を「グリーン電力証書」によって購入するというシステムを利用したのです。イベントの照明や音響などに使われている電力は、実際には電力会社から送電されたものですが、「グリーン電力証書」を購入することにより、自然エネルギー発電所が電力会社に販売した分を使用したとみなされます（自然エネルギー発電所から直接購入・送電せずに、こういったシステムを使うのは、送電の距離が長くなることによってエネルギーのロスが発生するためです）。ap bank fes'05で使った1日の電力は6000kwh、つまり3日間合計で18000kwhになります。その分の自然エネルギーを3日間、3社、3種類のエネルギー生産者から、グリーン電力証書として購入しました。1日あたり6000kwhというのは一般家庭の2年分の使用電力とほぼ同じ量にあたります。それを自然エネルギーでまかなったことによって、1日で3696kgのCO2の排出を抑制できたことになります。これによって支払われたお金は、自然エネルギーの普及にもつながります。(*二酸化炭素排出抑制量については火力平均の二酸化炭素排出係数〔0.616kg-CO2/kwh〕で計算)

※1日の使用電力、6000kwhというのはライブエリアの照明・音響にかかる電力、オーガニックフードエリアの音響・照明・各ブースで必要な電力を若干多めに見積もった量です。

＜太陽光発電＞
屋根や屋上などにシリコン半導体のパネルを取り付け、それに太陽の光が当たる事により発電する仕組みになっています。光があれば常に発電する性質を利用して腕時計、電卓、宇宙ロケットなど幅広く活用されています。

＜バイオマス発電＞
植物は太陽の光で光合成すると、大気中から二酸化炭素を吸い、有機物に変換して成長します。そのため、植物と生き物には有機物が含まれています。その有機物をバイオマスと呼び、有機物を使った発電方法をバイオマス発電といいます。木屑を燃料にしたり、菜の花やトウモロコシから液体燃料をつくったり、糞尿を発酵させてガス燃料をつくったりします。また、生活からでる生ゴミや下水汚泥なども有機物が分解されるとガスを発生します。これらの発電方法は、燃焼時にCO2を排出しますが、このCO2は自然の循環の中で植物に吸収されるため、実質的にはCO2フリーの自然エネルギーとして利用されています。

グリーン電力証書の購入元

Green Power BIOMASS	7月16日　日本自然エネルギー株式会社 北海道江別市のバイオマス発電
SOLAR	7月17日　株式会社自然エネルギー.コム 長野県飯田市の太陽光発電
pv -Green	7月18日　太陽光発電所ネットワーク（PV-net） 1都8県（静岡、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨）を中心とした全国の個人宅太陽光発電

※現在日本にある3社の、日本自然エネルギー株式会社、株式会社自然エネルギー.コム、太陽光発電所ネットワーク（PV-net）より1日ずつ、グリーン電力証書を発行してもらいました。

▼石橋香絵さん（日本自然エネルギー株式会社）
16日分グリーン電力証書発行・ブース出展

日本自然エネルギー（株）と（株）Governance Design Laboratoryの共同で販売しているグリーン電力証書Tシャツ(http://www.co2free.jp/)の紹介を通じて、会場の自然エネルギーと同じグリーン電力証書の紹介を行った。Tシャツは、在庫切れにより当日の販売はできなかったものの、多数の予約をいただいた。何よりうれしかったのは、「可愛いから欲しい」という声。ap bank fes'05も一緒だと思う。いくらエコでも、いい音楽がなくては、みんな足を運ばない。いいものといいエコ。この組み合わせが最高なんだな、ということを感じた。

▼中尾敏夫さん（自然エネルギー.コム）
17日分グリーン電力証書発行・ブース出展

私たちのコーナーでは、CO2を出さないグリーン電力を使った1日を過ごす事ができる「エナジーグリーン・パスポート」のプレゼントを行いました。CO2に見立てた大きなバルーンを用意し、1家庭が1日電気を使う事で排出するCO2を視覚的にアピールしたり、産地直送野菜にたとえたりしながら、グリーン電力証書の仕組みや今回のフェスにおける自然エネルギーの取り組みを来場者の皆さまにご紹介しました。3日間のブース出展の中で一番驚き、また感激したのが、来場者の皆さまの意識や関心が非常に高かった事です。私たちの活動に興味を持ち、理解し、自分たちにできる事を見つけ出す。それをしっかりと持ち帰り、自分の大切な人に伝えていく。フェス後に私たちへ頂いたたくさんのアンケートの回答を見ても、レゾナンスの広がりを実感する事ができました。

▼手塚智子さん（太陽光発電所ネットワーク　PV-Net）
18日分グリーン電力証書発行・ブース出展

ap bank fes'05を皮切りに、産地別のグリーン電力証書の販売をスタートしました。オーガニックの野菜を選ぶように自然エネルギーを選べるグリーン電力証書を、北は福島から南は宮崎までの品揃え。また、手回し発電機で太陽と発電量を競うワークショップ「太陽光発電でドン!」も好評でした。初日、自然エネルギーなんてとっつきにくいかなと思ったのですが、ライブを待つワクワク感と好奇心で、気軽に耳を傾けて関心を持ってくださる方がたくさんいたことは、新鮮でとてもうれしかったです。気持ちが開いているという感じでした。世界中に降り注ぐ太陽エネルギーの話、20万世帯以上の市民が日本で太陽光発電をしている話、グリーン電力証書が拡がると自然エネルギーの普及につながる話、一緒に話しているうちに、来場者、出展者、関係なくみんなで参加!という一体感のようなものを感じはじめていました。まるで同窓会のように、みなさんとの次回の再会が楽しみです。

ゴミ対策について

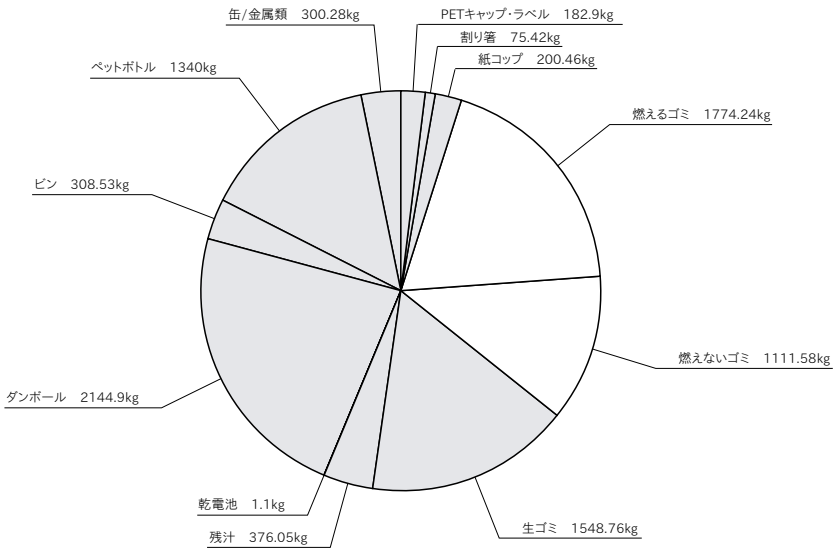
ゴミの9分別

ap bank fes'05で行われた、ゴミの9分別のうち焼却される燃えるゴミ、埋め立てされる燃えないゴミ以外の7つは、すべて資源としてリサイクルされました。

今回のap bank fes'05のゴミ対策では、「リサイクル率の向上」に重点を置き、リサイクルありきの分別を心がけました。そして、9分別することにして、その先のリサイクルをどうするのがベストか考え、リサイクル先の業者さんと話し合いをするところから始めました。
例えば、生ゴミは、会場のある掛川市の隣、袋井市にある養豚場でブタの飼料になりました。ブタが食べるものなので、生ゴミに楊枝や割り箸、串が混入しないよう来場者の方も注意して捨てて頂きました。しかし、オーガニックフードエリアで販売されたココナッツジュースのココナッツの殻は堅く、飼料にはできなかったので、イベント2日目から別回収を行い、つま恋の施設が所有する炭化装置によってリサイクルされました。
また、出店者には9分別の他に、搬入の際に利用するダンボールや調味料のビン等の分別回収にもご協力頂きました。

■野崎衛さん（株式会社エンヴァイロテック）
廃棄物リサイクルコーディネート

今回、我々はフェスから発生する膨大な廃棄物をリサイクルする、そのための分別方法、リサイクル企業の選定つまり排出から確実なリサイクルまでの実現をめざし検討、実施しました。
複数のリサイクル会社に協力を快諾頂き、同時にこの試みへの大きな期待を寄せられました。
ペットボトルは、参加したひとりひとりが全てキャップとラベルをとり、分別、ボトルを圧縮梱包して引き渡しという取組みに、リサイクル企業は懐疑的でした。私も半信半疑でした。しかし主催者並びにA SEED JAPANの力強い呼びかけそして参加者の共鳴で達成できたのです。開催前の我々スタッフ一同の思いと参加者6万人のひとりひとりとが共感できた喜びそして大きな達成感を持つことが出来ました。
多くの方々が「think wastes」ブースに訪れ、リサイクルや分別のことなど語りあい意見を言って頂いたことは、今後の我々の活動に大きく役立てたいと思っています。
エコへの気持ちを通して多くの人々が集まり、語り合い音楽を楽しむ。最高の3日間を体験させてもらいました。
そして最終日・機材搬出の時、搬入時と全く変らない塵ひとつない美しい芝生が輝いていた光景は、スタッフ全員の心に残ると確信します。



3日間のゴミの量ー9364.22kg

リサイクル率ー69.2%

- 燃えるゴミ　1774.24kg
- 燃えないゴミ　1111.58kg
- 生ゴミ　1548.76kg
- 残汁　376.05kg
- ダンボール　2144.9kg
- ビン　308.53kg
- ペットボトル　1340kg
- 缶/金属類　300.28kg
- PETキャップ･ラベル　182.9kg
- 割り箸　75.42kg
- 紙コップ　200.46kg
- 乾電池　1.1kg

9分別

【01】ペットボトル（ボトル）1340kg→（株）ペットリバースで分解･再生→ペットボトル

【02】ペットボトルキャップ／ラベル 182.9kg→（株）佐野マルカで分解･固形化→固形燃料
ラベルはRPF(Refuse Paper&Plastic Fuel)固形燃料となり化石燃料の代替となります。
キャップは破砕され助燃材としてサーマルリサイクル。

【03】缶（アルミ･スチール）、金属キャップ、金属類 300.28kg→（株）佐野マルカで分解･再生成→缶（金属類）
今回は飲料缶を導入していないので排出量は割合として少なくなっています。

【04】割り箸 75.42kg→王子製紙にて分解･再生紙化→コピー用紙（3膳でA4用紙1枚分）

【05】紙コップ 200.46kg→回収(ハイネケンジャパン)、紙繊維に分解(リパック)、製紙(明治製紙)→トイレットペーパー

【06】生ゴミ 1548.76kg→静岡県袋井市　東車堆肥センターにて加工→ブタの飼料
（一部硬質のものは、つま恋ゴミ処理施設にて炭化）

【07】乾電池 1.1kg→JFE環境（株）にて選別･分解して金属のみ回収→金属･鋼材

【08】燃えるゴミ 1774.24kg→つま恋清掃業者→掛川市清掃センターにて焼却
【09】燃えないゴミ 1111.58kg→つま恋清掃業者→掛川市埋立場にて埋め立て

●出店者からのゴミ
【10】ダンボール 2144.9kg→つま恋の清掃業者が資源ゴミとして回収→リサイクル
【11】ビン 308.53kg→つま恋の清掃業者が資源ゴミとして回収→リサイクル

＜簡易包装＞

ap bank fes'05では、簡易包装を心がけていました。来場者の方にはちょっと不便だったかもしれませんが、オフィシャルグッズの販売では、ビニール袋の配布等は行いませんでした。

＜リユースカップ＞

ap bank fes'05の会場ではリユースカップの使用を推進していました。このカップは最高90回洗浄して使える原料、ポリプロピレン製のプラスチックカップです。これまでのイベントで使われるドリンク容器・紙コップは1回きりの「使い捨て」。ゴミを減らそうという取組みの一つとして誕生したのが、このリユースカップです。
ap bank fes'05の会場では、リユースカップを返却してくださった来場者にap bank fes'05オリジナルの缶バッチなどのノベルティをプレゼントしていました。
もし、紙コップを使ったとしても、ap bank fes'05では、ティッシュペーパーなどの再生紙にリサイクルされる仕組みになっていました。

＜圧縮機＞

ap bank fes'05では廃ペットボトルの輸送のために圧縮機を設置。通常トラック3台にて搬出する廃ペットボトルを圧縮機で減容することによってトラック一台に集約。つま恋～リサイクル先（川崎）までの約200km（軽油使用量72L分）で、トラック移動の際に排出されるCO2、129.2kgを削減しました。

＜計量器＞

ap bank fes'05では、2台の計量器を導入し、ゴミの量を行いました。この計量器は専用サーバーへデータを無線送信し、オンタイムで数値を管理できます。また、種類別、日別、時間別での計量もおこないました。
一般の参加者の方もネットにアクセスすることによりパソコンや携帯電話からも随時閲覧可能になっていました。

ごみゼロナビゲーション

イベント会場でゴミ箱の前に立ち、来場者の方にゴミの分別の仕方をナビゲートしていたのは、A SEED JAPAN (Action for Solidarity Equality Environment and Development)のボランティアたち。
A SEED JAPANは、1992年にリオで開催された環境サミットに若者の声を届けようという思いで始まった、国際青年環境NGOです。彼らの活動のひとつが「ごみゼロナビゲーション」。「ゴミ」を入口に、音楽フェスというイベントの中で「しくみ」と「個人」に働きかけます。そしてイベントという非日常の空間から、日常にもどった来場者が社会を変える担い手になって欲しいと言う思いを込めて、1994年のreggae JAPAN SPLASHで「ごみセロナビゲーション」をスタートしました。
また、ap bank fes'05では、タワーレコードと共にリユースカップの利用促進も働きかけました。

▼羽仁カンタさん（A SEED JAPAN）
ごみゼロナビゲーション統括

僕たち国際青年環境NGO A SEED JAPANは、86人のボランティアのコーディネイトを行い、当日のごみゼナビゲーション活動を実施しました。当日の活動としてはオリジナルコラボごみ袋を作成し、入場ゲートにて来場者に配布しました。
会場内に9分別のごみ箱を設置して、できるだけ多くのごみをリサイクルや飼料化に回しました。
ペットボトルはかさばるので機械を使って圧縮して輸送にかかるエネルギーを削減しました。
ごみを出さないエコな飲み方を推進するため、オリジナルのリユースカップを作成し、来場者に貸し出しました。16000人近い来場者の方に借りて頂き、多くのごみを削減出来ました。
このイベントでの活動の話を頂いたのは、04年の12月でした。そこから本当に多くのみなさんとディスカッションを重ねて当日の活動を作り上げました。当初は、ミスチルのファンが圧倒的に多い中で、私たちのごみゼロが浸透するのか、心配でしたが、みなさんが積極的に参加してくれ、今までに無かったクリーンでピースなイベントが実施できたと思います。

ap bank partners（ap bank融資先）

ap bank partnersのブースでは、ap bankが行っている18件（2005年7月現在）の融資先の方々にお越し頂き、それぞれの活動をご紹介頂きました。
ブース内に所狭しと、ポスターやリーフレット、模型などを展示し、ブースに立ち寄られたお客様、ひとりひとりに丁寧にその活動や、それぞれが取り組んでいる環境問題について説明して下さいました。
また、各団体で扱っているものなどの販売もおこなって頂きました。

ブース内に設置された大型モニターでは、ap bank運営事務局スタッフが取材した融資先の活動紹介ビデオも上映されました。

えこふぁーむさん、大石和央さん、マーシャルズ・オーシャニック・インスティテュートさん、野田塩ベコの道さんはフードブースにも出店して頂き、特製のソーセージや、お茶、ココナッツジュース、ラーメン、アイスクリームなどを販売してくださいました。

各融資先の詳しい活動内容はap bankホームページ(www.apbank.jp)をご覧下さい。

ご参加頂いた融資先

●足元から地球温暖化を考える市民ネットえどがわ
（東京・江戸川区）
●一万城西部自治公民館（宮崎・都城市）
●「今立　古民家・匠ロングステイプロジェクト」実行委員会＋NPO法人 森のエネルギーフォーラム
（福井・福井市）
●えこふぁーむ（鹿児島・大隅半島）
●大石和央さん（静岡・榛原町）
●オーガニックテーブル（東京・足立区）
●小川町風土活用センター（埼玉・小川町）
●からつ市民共同発電所を実現させる会
（佐賀・唐津市）
●川合弘人さん（長野・富士見市）
●自然農法研究会（熊本・牛深市）
●芝静代さん（群馬・長野原町）
●NPO法人 地球の未来（岐阜・岐阜市）
●とんぼエコオフィス（千葉・船橋）
●ナイス・ヨコハマ（神奈川・横浜市）
●野田塩ベコの道（岩手・野田村）
●マーシャルズ・オーシャニック・インスティテュート
（太平洋・マーシャル諸島共和国）
●三好基晴さん／建築表示協会（神奈川県・藤沢市）
●再転車活用委員会（千葉・千葉市）

ap bank fes'05収支報告

設営・仕込み／7月8日(金)〜7月13日（水）
現地リハーサル／7月14日(木)・15日(金)
本番日／7月16日(土)・17日(日)・18日(月)
撤収作業／7月19日(火)

チケット売り上げ	¥8,500／１枚	7月16日(土)19800枚／17日(日)19822枚／18日(月)19450枚	¥502,112,000
その他収入	物販	オフィシャルグッズ（１０月１日までの通信販売売り上げ含む）	¥43,537,956
	出店収入	オーガニックフードエリア出店者ロイヤリティー、出店料	¥12,183,364
	協力金	賛同企業（株式会社エクシング、株式会社ファミマ・ドット・コム、トヨタ株式会社、日清食品株式会社）	¥12,694,500
収入合計			¥570,527,820

コンサート製作費	ライブエリア	舞台監督、大道具、音響、照明、映像、特効の機材費・人件費・制作費	¥147,960,000
		機材輸送費、リハーサルスタジオ費、その他備品制作費（パス、リストバンド、　配布チラシ）	¥20,107,853
		楽器テクニシャン人件費、マニュピレーター、楽器レンタル費、調律費、プロンプター費	¥8,933,542
	フードエリア	大型休憩テント・各出店テント、案内看板、入場ゲート、輸送費、音響設備、　設営人件費	¥25,009,740
		出店経費、出店管理経費	¥2,559,984
		環境対策（ボランティア管理費、ゴミ圧縮機・ゴミ計量器管理費、生ゴミ処理費、グリーン電力証書代金）	¥3,376,377
現地製作費		会場費（ライブエリア・フードエリア・楽屋エリア）	¥13,847,400
		会場設営費（プレハブ・仮設トイレ、看板）、舞台設営費（基本舞台・照明）、　客席設営費（バリケード）、電気工事、清掃費	¥57,393,058
		広告宣伝費（新聞広告・テレビスポット・ラジオスポット）、公演名義料、チケット販売手数料、印刷代（チケット・チラシ）	¥32,604,029
		アーティスト・スタッフ現地移動費（タクシー・高速代・電車）、レンタカー（ワゴン車・大型バス・保冷車）、燃料費	¥9,039,400
		アーティスト・ スタッフ食事代（１３日間／弁当・楽屋ケータリング・打ち上げ３日間）	¥14,001,475
		アルバイト（運営・設営）、警備員、医師、看護士	¥43,450,102
		著作権使用料、運営雑費（クリーニング代・宅急便・雨具・薬など）、イベンター制作協力費	¥12,693,200
出演アーティスト経費		アーティストギャランティ・諸経費（ヘアメイク・スタイリスト含む）	¥22,006,744
移動宿泊費		宿泊（出演者・スタッフ・ボランティア）	¥20,560,147
		移動（出演者・スタッフ・ボランティア）、レンタカー	¥6,650,826
イベント運営雑費		保険、ホームページ制作、雑費（打合せ交通費・備品代）、媒体取材諸経費	¥15,716,343
支出合計			¥455,910,220

収支	¥114,617,600

※賛同企業とは、ap bank fes'05の主旨に賛同し、例えばモバイルサイトの運営、会場内移動車の提供、物販制作協力など、ap bank fes'05のコンテンツ制作にご協力いただいた企業です。
※烏龍舎は企画・制作を担当いたしましたが、経費についてはスタッフの交通費、宿泊費分のみの計上となっております。

※この収益の約45%は税金として納付いたしますので、残りの約55%の6,300万円相当を第三期融資申し込み分への融資原資として使用します。第三期融資は45件のお申し込みをいただき、ap bankメンバーの他、専門スタッフによる厳正な審査の結果、既に、

■NPO法人かながわアジェンダ推進センター
（融資額500万円／環境省の委託事業「主体間連携モデル推進事業（くらしの省エネ普及啓発事業）」のつなぎ資金）
■コミュニティトレードal
（融資額200万円／フェアトレードショップの移転・改装経費）
■NPO法人ソフトエネルギープロジェクト
（融資額399万円／神奈川県立海老名高校への太陽光発電10kw設置に関するつなぎ融資）
■NPO法人とんぼエコオフィス
（融資額150万円／千葉県事業「県・市町村・NPOがともに築く地域社会事業印旛沼あっぷ推進事業」の事業費のつなぎ融資）

以上4件への融資が現在決まっており、その他12件の案件について現在審査中です。
融資実行についての使途額、使途内容についてはhttp://www.apbank.jpにて随時公開していきますので、そちらをご覧ください。

さいごに

ap bankにとって、初めての試みとなった、野外音楽フェス、ap bank fes'05。環境対策においても、今出来ることのベストをつくしたつもりではありますが、その中でも見つかった問題、そして「こうすれば良かった」というスタッフの思いをあつめました。次につなげていきたいと思います。

■ 石橋香絵さん
（日本自然エネルギー株式会社）

「イベント電力をグリーン電力にするだけではなく、何か参加型の仕組みがあればもっと面白いのではないか。例えば、今回co2free.jpプロジェクトで販売しているグリーン電力証書Tシャツを、ap bank fesTシャツとして売り出し（証書をつける、という意味で）、その販売に応じて、〇〇kWhが売れました、という実績がでると面白いのではないか。または、次回のap bank fes Tシャツを全て『グリーン電力証書Tシャツ』にしてしまうのもひとつの方法かと思う」

■川口美保さん
（オフィシャルパンフレット編集：SWITCH）

「紙の斤量をもう1ランク重くして、厚みをもう少し出せばよかったなと、出来上がってみて思いました。雑誌的な作りだったのもあり、観客にしてみれば、売値のわりになんとなく薄い印象がしたかもしれません。あの場所に来て、音楽や食べ物を通して何か感じた人たちが、家に帰ってこのパンフを読むと、その『感じたこと』が『具体的』になる内容だったので、なるべく参加者全員に読んでもらえるよう、例えば、パンフ込みの値段がチケット代で、全員に配れたらよかったのかなとか？　もちろん、そのためにあまり高くなっても意味がないので、そこは要検討ですが」

■ 田中退三さん
（オフィシャルグッズ制作・販売協力：ぴあ株式会社）

「ap bank fes'05のスバラシサに、何もいうことないです。次回以降はもっとこの気持ちをイベントに来れない方にも伝わるような広がりを考えたいと思っています」

■ 野崎衛さん
（廃棄物リサイクルコーディネート：株式会社エンヴァイロテック）

「排出量の大きな割合を占めた出展者の廃棄物の抑制を充分に検討したい。食材その他の梱包材を見直す。また、さらにブース別、エリア別にて排出量と種類を管理し問題点を現在化し、減量対策に反映させて行きたい。参加された方たちへは、もっとゴミ箱のその先にどんな処理をされているのか、わかりやすい展示が必要だと感じた」

■ 手塚智子さん
（太陽光発電所ネットワーク）

「イベントでの、省エネルギーと自然エネルギー活用の取り組みが、どこでどんな風に行われていたのか、もっとわかりやすく実感のわく案内があると良いと思います。例えば“トークステージのテーブルランプが、太陽の光で生まれた電力で灯されていたんだよ”と、トークショーに居合わせることができなかった人にも知ってほしいし体憩テント脇で静かに発電している太陽光パネルを見て触れて実感してほしい。ふりかえってみると、私たちもGreenPowerテントでたくさんの方と話して、いろんな反応をもらって、伝え方に工夫ができるなあと刺激を受けました。ごみだけでなくエネルギーについても、来場が気軽に参加できて、実際の効果が見た目に判るような仕掛けを、事前の準備が大変になるでしょうが次回はできないでしょうか。事前の出店者同士・地元の方との情報交換によっても、個別の取組みから有機的な連携が生まれておもしろいと思います。ap bank の次につながる取り組みに、とても期待しています」

■ 中尾敏夫さん
（自然エネルギー.コム）

「これまでに類を見ないコンセプトフェスだっただけに、伝えたい事はたくさんあっても、それをうまく伝える手がまだ完成されていない印象を受けました。もちろん私たちのブースも、どんな説明をしたら足を運んでくれた皆さまにグリーン電力について理解していただけるのか試行錯誤の3日間でした。そこに改善の余地が残されいると思います。また、喜ばしい事に私たちのブースも含めてエコに関する展示ブースに足を運ぶ方が大勢いらっしゃったのですが、人が溢れてしまったために、せっかく訪ねていただいたのに対応する事ができなかった方もおり、今後オーガニックフードエリア全体を拡充する必要を感じました」

■ 南兵衛@鈴木幸一さん
（オーガニックフードエリアコーティネート:アースガーデン）

「万々歳と言っていい今回のap bank fes'05でしたがあえて難を言うなら、提供食数の確保を優先したためにオーガニックとしての質を少々甘めに考えざるを得なかった事がやや残念でした。また何よりも前例のない取り組みに各出店者とも仕込みの量や手配も手探りで、十分に効率的な形が取れていたか、心許ないのも実際です。今回の実績とデータから次回に向けてはより効率的な形を模索できるでしょう。ある意味あの炎天下の中で行列に並び続けてくれた参加者の皆さんにこそ頭が下がります」

■羽仁カンタさん
（ごみゼロナビゲーション:A SEED JAPAN）

「リユースカップの導入やごみの分別を通して、僕たちのメッセージがどれだけ伝わったのか、はっきりとはわかりません。しかし、ap bank fesという素敵な空間において一人一人の来場者の方が何かを感じとって下さったのでは、という手応えがあります。ただ、「ごみ」という、イベントに関わる全ての人々に関係することでもあり、会場側やイベント運営携わる方など全てのセクションを巻き込んで行く必要があります。ap bank fesは日本一の環境対策が施されている音楽イベントと言っても過言ではありませんでした。この素晴らしい取り組みを、一部の共感する人たちだけの自己満足に終わらせないようにしていければと思います。種まきはできました。この種が芽を出し、花を咲かせるように、これからもよりエコで楽しいイベントをつくっていきましょう!」

■ 諸橋新之助さん
（KURKKU KITCHENシェフ）

「今回のイベントでKURKKU KITCHENとして一番問題となるのは、やはり用意した食数の少なさかと思います。オペレーションが割りと良かったのと従業員の頑張りで、あまりにも予定数をこなすのが早く、楽しみにされていたお客様に悲しい思いをさせてしまった事が悔やまれます。また、今回は初めてという事もあって、より提供しやすい形を追及して、そぎ落とした事も少なからずあったので、次回は美味しいだけでなく、楽しいもプラスした料理を提供したいと思います」

■ 藤岡亜美さん
（エコ雑貨出店:スローウォーターカフェ）

「ゴミ分別の徹底、省エネ、省資源、本会場と出店場所の距離感、アーティストやスタッフの姿勢、様々なデザイン、ボランティアの参加、など、今実践していることに関して、探したのですが反省点は特にないと思います。次のチャレンジとして、会場にコンポスト・トイレ（穴が掘ってあって大鋸屑をかけるエコトイレ）を3つくらいつくってみる。給水タンクを置いて、マイボトル、マイカップ持参を呼び掛けてみる（もしくはA SEED JAPANのマイカップ使用の徹底）。参加者が「自分にできるエコ」を書くコーナーをつくる、若い有機野菜の生産者をトークショーに呼ぶ、などど面白いこと順にチャレンジしていったらよいと思います」